

『わたしは決してあなたを見捨てない』

聖書 創世記第28章10～17節、ルカによる福音書23章39～43節
讃美歌 14 493 451 454(1～5) 29

説教 森田幸男牧師

今日は皆さんと聖書の中から二つの物語をご一緒に読んで、神様の恵みにあずかりたく思います。

旧約聖書の方からは、“ヤコブの夢”という箇所を読んでいただきました。そして新約聖書の方からは、キリストの十字架上の姿を描いたところを読んでいただきました。

ところで、旧約聖書と新約聖書とを併せてこの一冊の分厚い聖書になっているわけがありますけれども、旧約聖書、或いは、新約聖書とこう言います時に、「旧約」というのは「古い訳の聖書」、「新約」というのは「新しい訳の聖書」というふうに思っておられる方もたまにあるのですね。ですけれども、古い訳という場合の訳は翻訳の訳であります。私たちが今読んでおりますのは「新共同訳聖書」と言いまして、カトリックとプロテスタントの聖書学者が協力、共同して訳したものですから、これを「共同訳」と言います。古い共同訳の試作品もあったのですが、それをもう一度訳し変えたものですから、「新共同訳」と呼ばれております。その訳は翻訳の訳であります。以前使っていたのは、「口語訳聖書」、その前は、「文語訳聖書」というのもありまして、その場合の訳も翻訳の訳であります。けれども、旧約聖書、或いは、新約聖書と言う場合の「約」という字は、「翻訳」の「訳」ではなくて「約束」の「約」であります。

旧約聖書はこの聖書の三分の二ほどあって分厚いわけですけれども、これは、「神の約束の言葉」とこういうふうに覚えていただいたらいいかと思えます。新約聖書の方になって、これはイエス・キリストのことが書いてありますから、「キリストの約束の言葉」と思っていたらいいのではないかと思えます。勿論、始めから終わりまで全部が神の約束の言葉が書いてあるのではないということは、皆さんもご存じだと思います。けれども神の約束があって、その約束の言葉があって、それに会った人々、そういう物語を通して、或いは直接的な神様の言葉も勿論あるわけですけれども、そういう物語の形で、或いは歴史の形で、或いは詩の形で書かれているのが、「神の約束の言葉」「キリストの約束の言葉」こういうふうに言ってよいかと思えます。

今日は三、四十分お話をいたしますけれども、神の約束の言葉、或いはキリストの約束の言葉に、その片鱗にでも触れてくだされば嬉しいことでもあります。

ところで、聖書にはこれだけ多くのことが書かれてありますから、「その約束の中心」とは一体何なのか。いろんなことが書かれている。いろんな人が出て来るわけですけれども、その約束というのはどういう約束なのか。ところで、今日は“ヤコブの夢”という箇所から、今日のお話の題、『わたしは決してあなたを見捨てない』という題を付けましたけれども、それが神様がヤコブに語られた約束の言葉であります。

このヤコブという人はイスラエルの先祖ですが、皆さんも聞かれたことがあると思いますが、アブラハムという人がいます。その息子がイサクという人で、イサクに双子の息子がおりまして、兄はエサウ、弟はヤコブと言いました。従ってこのヤコブはアブラハムの孫に当たる人物であります。

今申しましたこのヤコブに神が語られた言葉、『わたしは決してあなたを見捨てない。あなたがどこへ行ってもわたしはあなたと共にいる』というのが神の約束の言葉であります。キリストの約束もまたそうであります。今一緒に歌いました讃美歌 493 番、昔は 312 番だったのですが、「いつくしみ深い 友なるイエスは」という讃美歌を歌いましたけれども、「全くわたしは一人ぼっちになっても、皆に捨てられるような状態になっても、イエス・キリストはわたしの友でいてくださる」という歌詞ですね。これがキリストの約束の中心にあることであります。「わたしはいついかなる時にも、あなたと共にいる。」これが神の約束、キリストの約束の言葉であります。

実は今日 9 時半から日曜学校をいたしまして、その時に旧約聖書の「ルツ記」、ルツの物語を子供たちと一緒に読んで、紙芝居をしたのであります。このルツ記というのはわずか 4 章から成る数ページの短い物語ですが、本当に味わい深いものですから、どうぞ皆さんも機会を得て読んでいただきたいと思えます。

この「ルツ」と言うのはイスラエルからすると外国・モアブの女性なんですけれども、ダビデ王の曾祖母になり、イエス・キリストの先祖になった人です。この人が本当にイスラエル人の姑、ナオミさんに尽くしたという話であります。このルツ記から画題を取ってあのミレーの『落ち穂拾い』という有名な絵が描かれました。婦人が麦畑で落ち穂を拾っているあの絵ですが、『落ち穂拾い』と言いまして、イスラエルではこういう神様の言葉があるのです。「あなたがたが麦を刈り取る時、或いはぶどうを刈り取る時、そしてオリーブを刈る時も、刈り尽してはならない。必ず残しておきなさい。また、それらを運ぶ時にもし束が落ちたら、それを拾いに戻るようなことはしてはいけません。それはそのままにしておきなさい。それは外国から寄留している人のため、或いは孤児のため、或いは寡婦のために残しておきなさい。あなたがたも昔エジプトで奴隷であった時、本当に辛い思いをしたでしょう。そのことを忘れないで、落ち穂はそのままにして、収穫も全部刈り込まないで、人々のために残しておきなさい。」こういう神様のお言葉があるんですね。それからミレーは『落ち穂拾い』という絵を描いているのです。ですからあの絵は田園風景でもあるわけですが、そこにある神様の本当にやさしい貧しい者への配慮に満ちた言葉がもたっているのですね。

このルツの話は私たちはよく知っていますが、今回改めて読んでみますと“あれ、こんな言葉があったなかと、発見の喜びを覚えた言葉に出会いました。こういう句がルツ記の 2 章の 20 節にありました。「生きている人にも死んだ人にも慈しみを惜しまれない神」という言葉であります。これは以前の口語訳では、「生きている者をも、死んだ者をも、顧みて、いつくしみを賜る神」となっております。

今日このようにお集りの皆さんの中には、かけがえのない愛する人を、思いがけない仕方、或いは病気で亡くされたという経験を持っている方は少なくないと思えます。とこ

ろが今ご紹介しましたルツ記の2章20節では、「聖書の神は、私たちの神は、生きている人にも、死んだ人にも、いつくしみを惜しまれない神様です」とこう書いてあるんですね。ただ私たちが今ここで生きているこの時ばかりでなく、いろんな形で召されて、亡くなっていくわけですが、「神様は、生きている者にも、死んだ者にも、いつくしみを惜しまれない。その者を顧みて、慈しみを施してくださる。」そのような神が聖書の神様だということなんですね。ですから私たちは「生きている時も、死ぬ時も、死の後も、神の惜しみない慈しみの中に常にあります。」とこういう信仰を表した言葉であります。

そして、「いつくしみ深い 友なるイエス」と先ほど歌ったのですけれども、「いつくしみ」という言葉は、ある意味では聖書を代表する言葉、新約聖書なら「愛」と置き換えてもいいのですが、「慈しみ」という言葉は訳すのも、言いかえるのも難しいのですが、ある聖書学者はこう言ったのです。「慈しみというのは<連帯>のことです」と。それをわたしは神学校時代に読んで、「これだ！」と思いました。これは先ほど申しました「共にいる」ということです。私たちが生きている時も、死ぬ時も、死の後も共にいる。そして惜しみなくその者を顧みてくださる。こういうことを聖書は「慈しみ」という言葉で表しているわけですね。生きている人にも、死んだ人にも、慈しみを惜しまれない神、これが私たちの聖書の神様で、すべての人の神であられる。ですから、私たちはいろんな意味の死別の辛い経験がありますけれども、神の慈しみの中にあるというこの事実は動かさないんですね。ですから皆さんの心にかかる亡くなられた方々のすべては、神様の惜しみない慈しみの中にあるわけですから、その神様にすべてをお委ねになればいいと思います。これから死んでいく自分の身も、神様の慈しみにお委ねになればいいと思います。

ところで、「麒麟」という漫才コンビが関西にいるんだそうですね。高齢の方はご存じないでしょう。「えんたつ・あちゃこ」と言えば高齢者で思い出す人もおられるでしょう。この間テレビを見ておりましたら、その「麒麟」の片方の田村裕という子が書いた、「ホームレス中学生」というのがえらく売れているということで、題名にひかれて、私は本屋にすぐ行って買って来て、3時間ぐらいで読みました。彼はお母さんを早く亡くしているのですが、中学の時に一家破産でお兄ちゃんとお姉ちゃんもいるのですが、お父さんが一家解散宣言を言って、皆ばらばらになって、中学生の彼は夏休みの一か月、近くの滑り台のある「まきふん公園」という名前を皆がつけた公園で過ごします。私が福島県の郡山にいた時に子供たちがよく遊びに行った「おっばい山公園」と呼んでいた公園がありました。正式名ではないのです。小山が二つ造ってあるのですが、それを子供が見るとお母さんのおっばいのように見えるので、「おっばい山公園」と呼んでいたわけです。

田村少年は近くの「まきふん」の形をした滑り台のなかで一か月過ごすホームレス状態になるのです。この間田村裕さんがテレビに出た時に、「人間関係のもつれも辛いけれども、食べ物のない辛さというのは辛抱できません」と言っていました。そして公園に生えている草も食べた。そして、ダンボールの箱も水に浸して柔らかくして食べたというふうな、ひもじい思いもするわけです。それで近くのコンビニに行って万引きをしようという気になるのですけれども、結局万引きはできなかったようです。お母さんの顔が浮かんで、彼はお母さん子だったようで、お母さんの悲しむ顔が浮かんで、遂に万引きしなかったけれ

ども、本当にひもじかった経験を書いている、「ホームレス中学生」という本です。

今日、先ほど読んでいただきました「ヤコブの物語」、ヤコブはベエルシェバを発って、伯父さんの住んでいる北方のハラシムへ向かいました。ベエルシェバは南の方ですからハラシムまでは約900キロあるのです。一日30キロ歩いたとしても、一か月かかる距離なんです。その一か月、ヤコブは正にホームレスだったのです。彼の場合は、何故家を出ないといけなくなったかという、お父さんは信仰深いイサクです。お母さんはリベカで、ヤコブはお母さん子だったのです。そして双子のお兄さんのエサウがいました。当然長男が相続するというのがイスラエルの仕来りなんです、けれど双子です。そしてお兄さんを騙して、お父さんのイサクはもう老いて目が見えなくなっていたので、そのお父さんを騙して、兄が継ぐべき相続権をヤコブは奪うわけです。それで兄が怒るんです。日ごろは余りいろんなことに頓着しないお兄さんだったようですが、さすがに相続ということになると、兄弟でも骨肉の争いになるのですが、それもひどい、騙すなどということをしたので、父親も間もなく死ぬだろうから、死んだら弟を殺してやると、恨み憎しみを持ったのです。それを知ったお母さんのリベカがヤコブに、「家を出て、伯父さんの所に行きなさい」と言って、ハラシムに向かって出すわけです。そして、ヤコブはある所に来て、石を枕にして一夜を明かす。そこで夢を見るわけです。

皆さん、野宿をされた経験はおありでしょうか。わたしは野宿とは言えないのですけれども、北海道苫小牧郊外の支笏湖のほとりで、今日東京から戻り礼拝に出ております次男の光君の友達たちとキャンプに行ったのです。子供達はテントを張ってそこで休んでいたのです。私は車のなかで休んでいたのですが、風が吹いて何かガサツと音がすると、ハッと目が覚めるのです。車の中において、子供たちがそばにいるそういう環境でも、野宿するというのは、だれか来たのではないかということで何度も何度も目が覚める。そんなちょっとした経験からしても、ヤコブの場合はどんなに心細かったであろうかと察します。兄貴に、あんな奴、殺してやると言われて逃げ出してきたのです。私たちは他人からでもそんなことを言われたら、本当に辛く、苦しくなってしまいます。ヤコブは双子の兄から殺してやると言われたのですから、本当に身の置き所がなくなってしまったのです。そして石を枕にするのですが眠れない。これからどうなるだろうか。そして、夢をみるのです。その頂が天に届く梯子を天使が上り下りしているという夢を見ました。

今日この会堂に初めて来られた方もおありかもしれませんが、ここにステンドグラスが2本と、こっちが5本と、こっちが5本とで十二本入っていますが、これはこの「ヤコブ」をテーマにして出来たステンドグラスです。十二本というのは、このヤコブから十二人の子供が生まれて、そこからイスラエルの民が増え広がって行ったのです。東へ西へと広がっていく。子孫が大地の砂粒のように多くなる。全くの孤立でいるその時に、神様のこういう約束の言葉があり、その通りになって行くんですね。ヤコブの十二人の子供、そしてイエス様の十二人の弟子、そして私たち現代に生きる神を信じる民というふうな意味も含めて、この十二本のステンドグラスが入りました。デザインは抽象的ですが、これは実は梯子を一応イメージしているのです。

ヤコブはそういう夢を見ました。そうすると神様が傍らに立たれて、『わたしは、あなた

の祖父アブラハムの神、父イサクの神である。あなたが今横たわっているその土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。』こういうふうには神様がヤコブに語られたわけでありませぬ。これを縮めて『私は決してあなたを見捨てない』と、今日の説教の題をつけました。

先ほどの「麒麟」の田村裕くんではありませんけれども、飢えの辛さというのは、私は1940年生まれですけれども、いつかあったかなと思っても、思い出せないのでね。飢えた経験というのは先ずないので。実際はあったと思いますけれども、思い出せないのです。「人間関係のもつれも辛いけれども」と田村裕くんも言っているので、漫才界でも大変なんでしょう。「けれども飢えの辛さは辛抱出来ない」と彼は言っていました。

このヤコブの場合は、人間関係のもつれなんてことではなくて、人間関係の破れです。双子の兄弟から「あんな奴は殺してやる」と言われた、そういう破れです。当然飢えの辛さもあります。どうしてそんなことになったかと言えば、自分が親を騙し、兄貴も裏切ったのですから、まあ言えば自業自得なわけです。もう八方ふさがり、どうにもならない孤立。孤立というのは、友達、親、兄弟等、関係の中にある人がいない状態が孤立です。

その時に、神様が、「私は決してあなたを見捨てない」と、こういうふうと言われるその言葉をヤコブは聞いたのです。その後、彼は自分のしたことの報いをうけます。人間は自分のしたことの報いを必ず受けるのです。蒔いた種は刈り取ることに必ずなります。因果応報というのはある部分では厳格に当てはまります。まぬがれることはできません。

けれどもそういう状態であるヤコブに、『私は決してあなたを見捨てない』と言われる。「ヤコブ」というのは親がつけた名前、もう一つ「イスラエル」という名前があって、二つの名前を持っている。ヤコブはイスラエルの先祖で、このヤコブという名前は、「神が守られる」という意味です。イスラエルというのは、「神が治めておられる。すべてを支配しておられる」という意味です。ですから自業自得で孤立無援状態に陥った彼なんですけれども、全てを支配しておられる神が守られるヤコブなんです。神は彼を守られる。

そして彼はこれから報いを受けて、伯父さんにさんざん騙されて、二十年間苦勞するのです。けれども、神は決してあなたを見捨てないと言われたこの約束を守り通されますし、ヤコブは恐れることもあるのですけれども、どうしようもなくなった時に、神がそう言われたことを想起する。そして、「神様、あの時はそう言われたでしょう。どうか助けてください」と、神にすがる場面が後で出てきます。これは創世記にあるのですが、創世記をずっと通して読まれると、アダムとイブから始まって、ノアの洪水の話、アブラハムの話、そしてイサクと、今日のヤコブの話があって、その子供のヨセフの話というのが創世記の流れです。これを一度通読されることをお勧めします。本当に味わい深い物語です。

この後、彼は本当に自分のしたことの報いを受けます。自分が騙したのですから今度は伯父さん・お母さんのお兄さんから騙されるのです。そんなところをずーと通って、しかし神は見捨てないと言われたその約束を守り通されたわけでありませぬ。

話は少し飛びますけれども、今日の箇所は、“ヤコブの夢”となっておりまして、また、“ヤコブの梯子”という題を付ける場合もあります。英語では、“Jacob s Ladder” (ヤコブの梯子)と言います。実はこういうのも“ヤコブの梯子”と呼ぶことを今回調べていて分かりました。今日は雲ひとつない秋空ですが、もう空一面曇って真っ暗という時もありますね。その時にその雲が裂けて、光が一筋輝いて来る時がありますが、あれを“ヤコブの梯子”と呼ぶそうです。英語圏の人はそう呼ぶんですね。

本当に真っ暗でどうにもならない時に、天からの光が雲を破って自分の上にサーッと射しこんで来る。そういう経験をヤコブはしたのです。そしてヤコブは眠りから覚めて、「『まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。』そして、恐れおののいて言った。『ここは、なんと恐れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ』」と、叫びます。

正にヤコブは一月近くホームレス状態だったわけですね。住む家を失っただけではなく、親子、兄弟の関係が切れてしまった。それで荒野でひとり恐れ不安で真っ暗の中にいた時に、正に天から光りが射し込んで来たのです。そして自分は完全な意味でホームレス、こんな人をホームレスと言うのだと思います。それがなんと「神の家の中に自分はいた」ということを発見するのです。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。ここはなんと恐れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」こう言って、彼はそのあと、ここを「ベテル」という名前を付けます。「ベテル」というのは、「神の家」という意味です。

私たちもそれぞれ言うに言われない問題を抱えてお互い生きているわけですが、そのことも具体的に解決するということにもなるでしょうけれども、或いはそうはいかない場合があります。生涯そのまま解決しないで死んでしまうということもあります。けれども、今も本当に孤立無援という中であっても、私たちは神の家、神の守りの只中に実は今あるわけですね。「生きている者も死んだ者も顧みて、惜しみなく慈しんでくださる神様」と、先ほどルツ記の2章20節の言葉を紹介しましたが、人間関係が破れるというのは、死ぬよりも辛いことだと思います。だからヤコブは一度死んだと言ってもいいと思うのです。そのヤコブが神の言葉によって復活するのです。

「死」と言うのは関係が切れることなんですね。実際のこの肉体の死もそうです。もう会えない死別もあれば、いろんな別れもあるわけです。死と言うのは関係の断絶です。しかも精神的にも、霊的にも、関係が切れてしまう。そういう状態を「死」と言っていると思います。

けれども神様はヤコブとの関係を切られなかったわけです。そしてこの後もずっとその約束を守り通されたわけです。その約束の中に私たちがいるわけです。先ほどの、「慈しみ」「連帯」というのはそういうことであります。Jacob s Ladder (ヤコブの梯子)というのは暗雲を裂いて光が射しこんで来る。八方ふさがりだけれども、上なる天は残っているのです。そこから光りは本当に射しこんで来るのです。「光あれ！」

わたしが郡山時代に市民俳句教室に行った時教えてもらった俳句があります。“俳句とい

うのは五七五でこんなことも表現できるのか！”と思ったのは、こんな俳句です。

<而して処女懐胎長崎原爆忌>というのです。原爆忌、季語は夏ですよね。処女懐胎というのは今から2007年前のことになりますね。マリア様の身ごもったことです。そこに至るまでの長い歴史があります。ずーっと天地創造からの歴史があって、それを<而して>でくるわけです。<而して処女懐胎>。そして今度はまた1945年8月9日まで来て、長崎に原爆が落ちます。「忌」というのは毎年の記念日ですね。今年も長崎原爆忌はあったわけです。そしてこれから毎年あります。そうしますと、<長崎原爆忌>というのは、過去、現在、未来、全部を抱えていますね。そして処女が懐胎した。長崎は何と言っても日本を代表するカトリックの盛んなところですよ。そこへ、キリスト教国アメリカが原爆を落としたわけです。だからもうそれだけでいろいろな意味が込められていて、神の奇跡として処女が懐胎し、神の御子がお出でくださらなければ、我々人類は本当に救われない。どこにも救いが見いだせないというふうなことを言っている俳句なんですね。その先生の指導の下で、わたしも一句作りしました。「ヤコブの梯子」のことはまだ知らない時にこういう句を作ったのです。

<雲裂けて 光一条 春の海>。「春の海」という季語を出されて、これで作りなさいと言われて、<雲裂けて 光一条 春の海>という名句を、わたしが作ったのです。これは教室においてなかなかの評判で、皆の選を受けて紹介されました。

正にヤコブはそれを経験したわけです。もう八方ふさがり、過去の罪を負って、これからどうなるか展望は全く開けない、絶望状態なわけです。けれども本当に雲裂けて、彼の上に光が射し込んだのです。それが私たち各自の人生の中でも本当に転機が起こるのです。それは復活と言っていいと思います。それはなにも明日を待つことはないのです。今日、私たちは神の家の中にあるわけです。ヤコブは、「ここは神の家だ。そうだ、天の門だ」と、叫びました。まことにそうです。私たちは今・ここで、神様の見守りの真下にあります。

もう一つのルカによる福音書の23章39節以下が読まれました。そこにキリストと共に二人の犯罪人が十字架に架けられていました。これは政治犯だと言われています。十字架刑は普通の犯罪人、強盗などの処刑法ではありません。政治犯を処刑する仕方が十字架刑なのです。キリストもそういう意味では政治犯とされたのです。革命を企てたということですね。実はこのステンドグラスを作られたのは三浦啓子さんというクリスチャン作家です。正面に十字架を三つ付けましょうと提案されました。私たちの教会ではデザインをどうするかで、今ここに十字架が一つ付いていますが、これを付けることで論争をしたのです。こんなのはいらない、偶像であるという主張もありました。わたし達はその提案を入れませんでした。しかし三浦さんは十字架を三つ潜ませて造られたようです。よくみないと分かりませんが。

その十字架に架けられた一人の犯罪人が、「お前がメシア・キリスト・救い主なら俺たちを救え！」と、十字架に架かりながら、苦し紛れにわめいています。するともう一人の者がたしなめて、「お前は神を恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」彼らは強盗をしたとか、殺人をしたとかいうことではないと思うのです。それこそ

世のため、義のために、自由のために、彼らは働いたのでしょけれど、時の政府が、宗教界がそれを断罪したわけでありませ。だからこんな目に遭わされることはしていないと彼らは言っているのですけれど、そのひとは、「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから当然だ」と、極刑を受け入れているのです。何故でしょう。彼は十字架に架けられて、キリストを傍で見たのです。そうすると、自分たちは正義のために、民衆の自由のために、それこそ命をかけてやってきたんだという思いもあったのでしょけれど、キリストの姿を傍で見ていたら、そういうことをやって来た自分の欠け、足りなさに気付いたのではないでしょか。そしてキリストに言うのです。「『キリストよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください。』するとイエスは、『はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる』と言われた。」前の訳は、「樂園」は「パラダイス」となっていました。これはアダムとイブが住所として与えられた場所、樂園です。パラダイスは元来、王様の庭園のことです。

十字架に架けられているのですから、もうどうにもならないのです。しかし、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」とキリストは言われます。明日、否、やがて、最後の審判の時に神様が公平に裁いて下さって、あなたがたの義が認められて……と、そんなまどろっこしい話ではないんですね。「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われました。ヤコブが本当に荒野で神の家にいるという言葉を経験したのと同じです。

そのように私たちも、もうどうしようもない状態に陥る。誰もそんなことを望む人はいませんけれども、本当に落ち込んでしまうのが、我々人間です。けれども、神は、キリストは、「わたしはあなたと共にいる。何があっても決して見捨てない」と約束されるのです。これが聖書がいろんな形で私たちに語っている神様の約束の言葉、慈しみの言葉ということなのですね。生きていくことは中々しんどいことでもありますけれども、このように語られて、生きている時も、死ぬ時も、死の後も、本当に慈しみを惜しまれない神の御守りの真下に、今、わたしがおかれているのです。ですから具体的問題は解決しないかもしれません。一生解決しないかもしれません。けれども、しかしそれはたいしたことだけれども、たいしたことではないと思います。神が私たちと関係を切られないのですから、私たちはもう一度、私たちはいずれの時にか、破れた関係を必ず回復することができます。そのことを心に刻んで、信じて、今日から新しい歩みをなして行きたく思います。

お祈りいたします。

慈しみ深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたの変わらない顧みを今新たに覚え、心から感謝いたします。どうか私たちの昨日も今日も明日も、あなたの惜しまれない慈しみの中にあることを信じ、また思い起こし、日々を歩いていくことができますようお守りください。そしていっそうあなたの御約束の確かであることの経験を深めることができますようお導きください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン